

クライアントのアタッチメントパターンと心理療法における内的体験

—成人への個人心理療法に関する研究の概観を通して—

田附 紘平

1. はじめに

Bowlby が提唱したアタッチメント理論は、乳幼児と養育者の関係を探究するものである。アタッチメントとは、乳幼児が苦痛や不安など何らかの危機を感じた際に、養育者に近接しようとする本能的な性質を指し、乳幼児はアタッチメント行動をとることによって安全を確保する (Bowlby, 1969)。心理療法との関連においては、アタッチメント理論は乳幼児と親の関係性への介入に取り入れられることが多い (中尾, 2007)。しかし、アタッチメント理論は乳幼児と養育者の二者関係を探究するものであり、1980 年代半ば以降、成人のアタッチメントも研究対象となったことから、成人への個人心理療法にもアタッチメント理論は取り入れられるようになってきている (Slade, 1999)。クライアントのアタッチメントのあり方と成人への個人心理療法の関連についての研究は数多く存在している。例えば、Daniel (2006) は統計的検討を用いた研究を効果研究とプロセスに関する研究にわけて概観を行っている。Daniel (2006) が概観している研究以外に、事例研究も多いのに加えて、新たな研究や我が国の研究などもある。本稿では、クライアントのアタッチメントのあり方と成人への個人心理療法の関連についての研究を幅広く概観し、その成果や課題について検討することを目的とする。そのことを通じて、今後の展望として、クライアントの内的体験 (第 4 節で詳述する) について探究する意義を示したい。

2. 成人のアタッチメントパターン

アタッチメント理論にもとづいた研究がなされる際、アタッチメントのあり方はアタッチメントパターン¹として捉えられる場合が多い。本稿では、アタッチメントパターンを「アタッチメントの個人差を数種類に類型化したもの」と定義することにする。アタッチメントパターンは個々人の内的作業モデルの質によって規定されていると考えられている (Shaver&Mikulincer, 2004)。Bowlby (1969, 1973) は、アタッチメントを向ける対象であるアタッチメント対象が近くに存在するかどうかにかかわらず、恐怖を感じる事態において個人が望む場合にアタッチメント対象に接近可能であり、応答してくれるか、という確信が個人に表象として形成されてい

¹ 本稿では、「アタッチメントパターン」を Adult Attachment Interview によるアタッチメント分類と質問紙によるアタッチメントスタイルの両方を包括する概念として捉える。

ると考え、これを内的作業モデルと呼んだ。1980年代の半ば以降、乳幼児以降のアタッチメントが問題となり、外的な行動だけではなく、個人に内在化された表象レベルのアタッチメントを探究しようとする動きがでてきたことから、Bowlby が提唱した内的作業モデルについて積極的に研究されるようになった（遠藤, 1992）。坂上（2005）は、様々な研究を概観した上で、内的作業モデルについて「アタッチメントに関する情報への注意や、アタッチメントに関する記憶、感情、行動の体制化をすすめる、大概は無意識的に働く心的ルールとしての役割を果たし、個人の対人関係のあり方に一貫性と安定性をもたらすものである」（p.35）と述べている。本稿でも坂上（2005）の理解に沿って内的作業モデルを捉えることとする。

成人のアタッチメントパターンの測定について盛んに研究が行われているが、現在では2つの方法が大勢を占めている。1つは Adult Attachment Interview (以下 AAI と略記) (Main&Goldwyn, 1984) によるものである。AAI は、面接法によって実施され、親との関係に関する語りの形式に着目し、対象となる人を自律/安定型、とらわれ型、アタッチメント軽視型、未解決/無秩序型の4つのいずれかに分類する (Hesse, 1999)。Hesse (1999) によると、自律/安定型は、協力的な語りをし、体験自体が好ましいかどうかにかかわらず、その描写や評価は一貫している。アタッチメント軽視型は、アタッチメントに関する体験や関係性を軽んじ、親を理想化して語る一方で詳細なエピソードは語られない。とらわれ型は、冗長な語りをし、過去のアタッチメント対象との関係や体験にとらわれており、怒りやおそれが表出される。未解決/無秩序型は、喪失や虐待についてのエピソードを語る際に、混乱した様子がみられる。例えば、亡くなっている人が物理的にまだ生きていると語るなど、現実検討に欠けた語りがなされる。

もう1つの流れは、質問紙による測定²であり、その代表的なものに The Experiences in Close Relationships inventory (以下 ECR と略記) (Brennan et al., 1998) がある。ECR は、Bartholomew&Horowitz (1991) が提唱した直交する2次元から4つのアタッチメントパターンが構成されるという考えをもとに開発された多項目式の質問紙である。ECR は、以前から存在した60ものアタッチメントパターン尺度を因子分析で集約したものであり、現在では非常によく

		アタッチメント不安	
		低	高
アタッチメント回避	低	安定型	とらわれ型
	高	軽視型	おそれ型

図1 Bartholomew & Horowitz (1991) をもとにした ECR による成人アタッチメント4分類

用いられている。ECR による4分類は、Bartholomew&Horowitz (1991) の4分類に対応して、アタッチメント不安とアタッチメント回避の高低の組み合わせから構成される (図1)。

Bartholomew&Horowitz (1991) によると、安定型は、他者との親密な関係を心地よく感じ、自律性も維持できる。とらわれ型は、他者に依存的であり、親密な関係性にのめり込む。軽視型は、他者の重要性を最小化し親密さを回避しようとする。おそれ型は、内心では他者との親密な関係を求めるものの、拒否されるのを恐れるために、実際には自ら親密な関係を拒む。

AAI や ECR を中心とした質問紙が、それぞれ成人の内的作業モデルの何を測定し、アタッチメントパターンとして類型化しているかについては数多くの議論がなされている (Hesse, 1999; Jacobvitz et al., 2002; Shaver&Mikulincer, 2004 など)。その議論のなかで、両者には測定対象と

²概念的枠組みである AAI と研究法の一つである質問紙を対比することに疑念を抱かれる場合もあると思われるが、成人のアタッチメント研究においては AAI と質問紙の対比は慣例的に行われているため、本稿でもこのような対比を用いる。

方法に差異があることが指摘されている。AAI は主に過去の親との関係を対象としているのに対し、質問紙は、現在の一般他者および恋愛関係をはじめとしたパートナーとの関係を対象としている。さらに、AAI は面接によって得られた語りを、中立な評定者が厳密なコーディングシステムにもとづいて評定するのに対し、質問紙は回答者の主観的な報告に依拠している。実際、Crowell et al. (1999) は AAI をはじめとした面接法と質問紙法によるアタッチメントパターンの相関はみられないことも多く、相関が見出されたとしても中程度であるとも論じている。これらをふまえ、Jacobvitz et al. (2002) は、AAI は無意識的プロセスを測定しているのに対し質問紙は意識的評価を査定していると指摘している。一方で、質問紙によって測定されたアタッチメントパターンも無意識的なプロセスを含んでいるという主張もなされている。Shaver&Mikulincer (2004) は、ストループ課題や Implicit Association Test などの無意識的、潜在的な過程を測定する実験と質問紙により測定されたアタッチメントパターンの関連についての研究をレビューし、質問紙によるアタッチメントパターンも AAI による各分類に特徴的な無意識的な情報処理方略を反映していると指摘した上で、質問紙によるアタッチメントパターンは AAI 分類と同一ではないが、中核的な特徴は共通していると論じている。その意味で、ECR などの質問紙によって分類される安定型、とらわれ型は AAI 分類の自律安定型、とらわれ型にそれぞれ対応し、質問紙における軽視型とおそれ型は、AAI 分類でのアタッチメント軽視型から派生するという考え (Bartholomew&Horowitz, 1991) にも一定の妥当性があると言えるだろう。

3. クライアントのアタッチメントパターンと成人への個人心理療法の関連についての研究の概観

クライアントのアタッチメントパターンと成人への個人心理療法の関連についての研究のうち、統計的検討を用いたものは、(1) 効果研究と (2) プロセスに関する研究に大別することができる (Daniel, 2006)。本節では、さらに (3) 事例、著者自身の臨床経験および AAI による知見をもとにクライアントの特徴を具体的に記述した研究も加えた上で概観したい。

(1) 効果研究

ここには、クライアントのアタッチメントパターンを用いて心理療法の効果を測定している研究が当てはまる。さらに効果研究は、心理療法を経てクライアントのアタッチメントパターンに変化がみられることを示す研究と、心理療法開始当初に測定したアタッチメントパターンによる心理療法の効果の差異を検討する研究にわけることができる。

アタッチメントパターンの変化に着目した研究

クライアントのアタッチメントパターンの変化に着目した研究は、行った心理療法の有効性を検証するため、クライアントがもつ安定型以外の不安定型もしくは未解決/無秩序型のアタッチメントパターンが心理療法によっていかに減り、安定型が増すかについて検討されている。

Fonagy et al. (1995) は、精神疾患の入院患者 82 名に対し、個人と集団の精神分析的な心理療法を含む治療を行い、患者の入院時と退院時に AAI を実施した。その結果、82 名のうち 35 名の AAI 分類に変化がみられ、変化がみられた全員が入院時には不安定型に分類されていた。そして、その 35 人のうち 40%が退院時には自律/安定型に変化したことが示された。

Stovall-McClough&Cloitre (2003) は、幼少期の虐待に関わる PTSD の女性患者 18 名に対して持続エクスポージャーもしくは情動や対人関係に関するスキルトレーニングを 16 セッション行い、その前後に AAI を実施した。治療前には未解決/無秩序型が 13 名いたが、治療後には 5 名に減り、治療前に 2 名だった自律/安定型が 9 名に増えたことが見出された。

Diamond et al. (2003) は、境界性人格障害のクライエント 10 名に対して Transference focused psychotherapy を行った効果を検討した。心理療法開始時と 1 年後に AAI を実施したところ、10 名のうち 3 名が不安定型もしくは未解決型/無秩序型から自律/安定型に変化し、また別の 3 名が不安定型もしくは未解決型/無秩序型から分類不能になった。残りの 4 人には変化がみられなかった。また、心理療法開始時に未解決/無秩序型に分類された 4 人は皆、1 年後には、そうとは分類されなくなっていたという結果も示された。

Levy et al. (2006) は、どのオリエンテーションの心理療法が人格障害の患者に対して有効であるかについて AAI を用いて検討した。Levy et al. (2006) は、90 名の人格障害の患者を、Transference focused psychotherapy、弁証法的行動療法、修正精神分析的的支持的心理療法のいずれかに割り当て、心理療法開始時と 1 年後に AAI を実施した。1 年後の AAI では、Transference focused psychotherapy の患者のみ自律/安定型の数が有意に増えていた。

Travis et al. (2001) は、29 名のクライエントに平均 21.4 セッションの Time-limited dynamic psychotherapy を行った。これまでの研究は AAI を用いてアタッチメントパターンを把握していたのに対し、Travis et al. (2001) は心理療法開始時と終了時の面接映像をもとに、評定者がアタッチメントパターンを ECR の 4 分類のいずれかに分類した。心理療法開始時は 29 人全員が不安定型（軽視型 7%、とらわれ型 38%、おそれ型 55%）に分類されたが、終了時には安定型 24%、軽視型 14%、とらわれ型 34%、おそれ型 28%となっており、安定型の増加とおそれ型の減少が統計的に有意な結果であった。

AAI を用いていない Travis et al. (2001) を含めた上記の研究すべてで中立の評定者がクライエントのアタッチメントパターンを査定しており、そこでは不安定型もしくは無秩序/未解決型のクライエントが心理療法によって安定型に変化することが概ね示されていると言えるだろう。

アタッチメントパターンと心理療法の効果に関する研究

心理療法開始当初に測定したアタッチメントパターンと心理療法の効果の関連についての研究は、心理療法がどのようなアタッチメントパターンをもつクライエントにより有効かを検討するために行われている。

Fonagy et al. (1996) では、上記の Fonagy et al. (1995) と同じ患者のうち、入院時に実施された AAI で軽視型であったクライエントは、他のパターンよりも退院時の機能の全体的評定 (GAF) が有意に上昇したことが示された。

Tyrrell et al. (1999) は、クライエントと援助者のアタッチメントパターンの相互作用について検討した。クライエントと彼らのケースマネージャー 54 人に AAI を実施し、AAIQ セット法³ (Kobak, 1989) をもとに評定がなされた。研究の結果、アタッチメントの活性度が低いクラ

³ AAIQ セット法とは、AAI における分類基準から Kobak が抽出した 100 項目を、調査協力者にいかに当てはまるかについて並び替えることでアタッチメントの測定を行おうとするものであり、アタッチメントの安定性と活性度の 2 つの観点から評定される。

イエント（ex.軽視型）は、活性度の高いケースマネージャー（ex.とらわれ型）と組んだ方がクライエント評定の生活満足度やケースマネージャー評定の GAF が高くなっており、逆のペアも同様の結果がみられた。ただ、この研究は心理療法におけるセラピストではなくケースマネージャーを対象としており、あくまで参考として捉えておく必要があるだろう。

Levy et al. (2011) は、14 論文に記載された 19 種類の心理療法の効果についてアタッチメントの安定性と、アタッチメント不安およびアタッチメント回避の 2 次元の観点からメタ分析を行った。なお、AAI を用いた研究はこのメタ分析では対象となっておらず、アタッチメントの測定の内訳は質問紙によるものが 16、セラピストによるものが 1、第三者によるものが 2 であった。効果の測定の内訳は、質問紙のみによるものが 9、第三者のみによるものが 4、それらの併用が 6 であった。メタ分析の結果、アタッチメントの安定性と心理療法の効果には正の関係が、アタッチメント不安と効果には負の関係が示された。さらに、クライエントが女性もしくは高齢の場合にはアタッチメントの安定性と心理療法の効果の正の関係が弱くなることもあわせて指摘された。

Levy et al. (2011) のメタ分析に含まれていない AAI 以外の研究としては、Sauer et al. (2010) がある。Sauer et al. (2010) は、95 人のクライエントに対し、心理療法初期に質問紙でアタッチメントパターンを測定した。クライエントのアタッチメントが安定的であるほど、心理療法終結時に質問紙によって測定された抑うつや不安といった心理的苦痛が低くなっていた。

上記の研究において、アタッチメントパターンや心理療法の効果の測定は、質問紙や第三者による評定など様々な方法でなされていた。しかし、研究結果としては、心理療法開始当初にクライエントが安定型であると心理療法の効果が高いことが概ね示されており、アタッチメントパターンや心理療法の効果が様々な水準で測定されていながらも、ある程度一貫した結果が得られていると言えるだろう。

これまでみてきたように、効果研究は、効果に関する指標が心理療法の前後でいかに変化しているかを検討しており、実施された心理療法を外側の視点から評価していると考えられる。

(2) プロセスに関する研究

この研究では、治療同盟の評価、セラピストの介入、クライエントのふるまいなど、心理療法のプロセスにおいて重要なトピックとアタッチメントパターンの関連が検討されている。

アタッチメントパターンと治療同盟の評価に関する研究

クライエントのアタッチメントパターンと治療同盟の評価の関連についての研究は、治療同盟が好ましいものであると心理療法の効果が高くなること（Horvath et al., 2011 など）から、心理療法の基盤となる治療同盟のあり方がクライエントのアタッチメントパターンによってどのように異なるのかについて検討している。なお、これらの研究において治療同盟は、主に、治療目標がクライエントとセラピスト間で一致しているか、実際に行っている課題に対する認識が両者間で一致しているか、両者の情緒的絆はどのように形成されているかという点から質問紙によって評価されている。

上記の Tyrrell et al. (1999) は、治療同盟の評価に関してもクライエントと援助者のアタッチメントパターンの相互作用があることを示した。そこでは、AAIQ セット法で評定されたアタ

タッチメント活性度が低いクライアント（ex.軽視型）はアタッチメント活性度の高いケースマネージャー（ex.とらわれ型）と組んだ方が治療同盟の評価は高くなり、その逆のペアも同様に治療同盟の評価が高くなることが示された。

Diener&Monroe (2011) は、質問紙で測定されたクライアントのアタッチメントパターンとクライアントによる治療同盟の評価の関連についての 17 の研究をメタ分析した。メタ分析によると、アタッチメントの安定性が高いと治療同盟が高く評価され、不安定性が高いと低く評価されていた。さらに、セラピストによる治療同盟の評価と比較してクライアントによるそれはクライアントのアタッチメントパターンとより密接に関連していることも見出された。

Bernecker et al. (2014) も、質問紙により測定されたクライアントのアタッチメントパターンとクライアント評定の治療同盟の評価の関連についての 24 の研究をメタ分析した。なお、24 のうち 10 の研究が Diener & Monroe (2011) でも分析対象になっていた。メタ分析の結果、アタッチメント不安とアタッチメント回避は両方治療同盟の評価と負の関係にあることが示された。

吉見・葛西 (2009) は、17 名に対して心理療法ロールプレイを 2 セッション行った。その結果、質問紙によって測定されたクライアントのアンビバレント得点（とらわれ型と対応する）とクライアントによる治療同盟の評価に負の相関がみられた。

上記の研究では、Tyrrell et al. (1999) だけが AAI を用いて援助者とクライアントのアタッチメントパターンの相互作用を検討しており、他の研究とアタッチメントパターンの測定法や問題意識が異なっている。質問紙を用いてアタッチメントパターンを測定している研究では、クライアントのアタッチメントパターンが安定型だと治療同盟の評価が高く、不安定型だと低くなることが一貫して示されていると言えるだろう。

アタッチメントパターンとセラピストの介入に関する研究

クライアントのアタッチメントパターンとセラピストの介入の関連についての研究は、実際に行われているセラピストの介入を明らかにすることで、セラピストによる介入がより適切なものとなることを目指して行われている。

Dozier et al. (1994) は、援助者の介入におけるクライアントと援助者のアタッチメントパターンの相互作用を検討した。27 人のクライアントと彼らの 18 人のケースマネージャーに AAI を実施して AAIQ セット法による評定を行い、ケースマネージャーへの面接調査をもとにクライアントの依存欲求への反応と介入の深さを評定した。その結果、安定型のケースマネージャーはクライアントの潜在的な依存欲求に反応しやすい一方で、不安定型のケースマネージャーは顕在的な依存欲求に反応しやすかった。さらに不安定型のケースマネージャーは軽視型よりもとらわれ型のクライアントに情緒的な介入をしやすかった。Tyrrell et al. (1999) と同様、この研究もケースマネージャーを対象としていることに留意する必要があるだろう。

Hardy et al. (1999) は、10 名の psychodynamic interpersonal therapy におけるトランスクリプトをもとに AAI に準じてクライアントのアタッチメントパターンを分類し、アタッチメントパターンによるセラピストの介入の差異について検討した。その結果、セラピストは、とらわれ型のクライアントには問題の理解を促すリフレクションを、軽視型のクライアントには新たな理解を提示する解釈をする傾向があることが示された。

Rubino et al. (2000) は、臨床心理学を専攻する大学院生 77 名に、ECR の 4 分類の特徴をそ

れぞれもつクライアントのロールプレイ映像をみせ、自分がセラピストならどのように介入するかを尋ねた。その結果、調査協力者のアタッチメント不安が高いと回答の共感性が低く、特に安定型とおそれ型のクライアントへの共感性が低かった。また、調査協力者は、安定型と軽視型よりもおそれ型のクライアントに共感を示し、軽視型よりもとらわれ型クライアントに共感を示した。さらに、調査協力者は、安定型と軽視型よりも、おそれ型クライアントにはクライアントが意識していないことを返すといった深い介入をしやすかった。

上記の研究では、用いられているアタッチメントパターンの測定法が異なっていることもあり、得られている結果は様々である。ただ、Hardy et al. (1999) や Rubino et al. (2000) からは、アタッチメントパターンの測定法が異なっているなかでも、アタッチメントを回避する傾向が高いクライアントには、共感的というより新たな理解を提示するような解釈的な介入がなされやすいことが共通して示されていると言えるのかもしれない。

アタッチメントパターンとクライアントのふるまいに関する研究

クライアントのアタッチメントパターンとクライアントのふるまいの関連についての研究は、クライアント理解を深めることを目指して行われている。

Dozier (1990) は、深刻な精神疾患をもつ患者 42 名に AAI を実施し、AAIQ セット法で評定した。アタッチメントの安定性の高い患者は、臨床家に治療に対して意欲的であると評定されやすく、アタッチメントの活性度が低い (ex. 軽視型) 患者は治療をあまり活用しないのに加えて助けを求めることをせず、自己開示もあまりしないと評定されやすかった。

Korfmacher et al. (1997) は、低所得者の初産の母親 55 名に対して AAI を実施し、子どもが 12 ヶ月になるまで個人療法と集団療法を行った。安定型の母親は、他のパターンよりも洞察的心理療法、支持的心理療法など様々な治療法を受け入れやすいことが示された。また、軽視型と無秩序/未解決型の母親は安定型よりも治療に情緒的にコミットしにくいことが示され、さらに無秩序/未解決型の母親は他のパターンよりも多くの危機的介入を必要としたと報告された。

Saypol & Farber (2010) は、117 人のクライアントに質問紙調査を実施したところ、アタッチメントの安定得点が高いと自己開示をしやすく、軽視得点が高いと自己開示はあまりなされないと回答された。また、安定得点の高さと、自己開示後の快感情の高さおよび不快感情の低さとの間に正の相関がみられ、おそれ得点の高さと自己開示前後での不快感情の高さとの間にも正の相関がみられたことが報告された。

上記の研究では、AAI や質問紙によってアタッチメントパターンが測定されており、主に治療への意欲や自己開示について検討されている。アタッチメントパターンの測定法によって研究結果が異なるわけではなく、安定型クライアントは治療に意欲的で自己開示をしやすく、軽視型クライアントは自己開示をあまりしないことが一貫して示されていると言えるだろう。

これまでみてきたように、プロセスに関する研究は、クライアントとセラピストが実際にどのような関わりをするのかについて、治療同盟の評価、セラピストの介入、クライアントのふるまいという側面からアタッチメントパターンとの関連を客観的に検討していると考えられる。

(3) 事例、著者自身の臨床経験および AAI による知見をもとにクライアントの特徴を具体的に記述した研究

これまでみてきた統計的検討を用いた研究だけではなく、事例、著者自身の臨床経験およびAAIによる知見をもとにクライアントの特徴を具体的に記述した研究（以下、クライアントの特徴を記述した研究と略記）も数多く存在している（Homes, 1993, 1998；工藤, 2004；三上, 2009, 2013；Slade, 1999；Szajnberg&Crittenden, 1997；Wallin, 2007）。この種の研究も、上記のクライアントのふるまいに関する研究と同様、クライアント理解を深めることを目指して行われている。それらの知見をまとめると以下になる。安定型クライアントは、内省的に自ら治療を進めていき、情緒の表出も過度なものとならない。軽視型クライアントは、抽象的、知的な語りが多く、悲しさや不安といった情緒は語られにくい、その様子からは否定的な情緒が感じられているようにもみえる。彼らのエピソードは具体性に乏しく、硬直した語りになりやすい。とらわれ型クライアントは、情緒を制御する構造が弱く、悲しみや不安などの否定的な情緒を多く表明し、語られない体験に圧倒されているようにみえる。また、彼らは、話がまとまりにくく、他者との関係について中心的に語り、セラピストに対して依存的なあり方を示す。おそれ型クライアントは、断片的なエピソードを語り、セラピストからみれば苦痛を感じていると思われるが表明はされない。さらに、彼らは心理療法のなかで対象を非難し、攻撃することはみられないとも指摘されている。無秩序/未解決型クライアントは、矛盾した内容を話すこともあり治療に抵抗やおそれを示しやすい。また、彼らは未解決なトラウマを有している場合が多く、そのトラウマをコンテインできるほどの物語を見つけられていないとされる。

これらの研究では、セラピストもしくは著者がクライアントのアタッチメントパターンを見立てている、あるいはAAIの各分類にあてはまるクライアントが心理療法に來談したことが想定されている。そこでは、各アタッチメントパターンを示すクライアントの語り、記憶、情緒表出などのあり方がセラピストからみた特徴として整理されており、クライアントが心理療法において実際にどのようにふるまうかだけではなく、統計的検討では捉えることの難しい、クライアントのなかで生じている心理過程に関する細やかな特徴も示されていると言えるだろう。

4. クライアントの内的体験について検討する意義

これまでクライアントのアタッチメントパターンと成人への個人心理療法の関連についての研究を概観してきた。研究の概観によると、クライアントのアタッチメントパターンは、(1) 効果研究、(2) プロセスに関する研究、(3) クライアントの特徴を記述した研究のなかで論じられていることが示された（表1）。これらの研究は、主に実施した心理療法やクライアントを客観的に理解する上で重要な示唆を与えてくれると考えられる。一方でRogers（1957）の共感的理解に代表されるように、クライアント自身がどのような体験をしているかというクライアントの立場からの体験もクライアント理解を深めるためには非常に重要であると考えられる。クライアントの特徴を記述した研究は、クライアントのなかで生じている心理過程も検討しているため、クライアントの立場からの体験理解にも示唆しうると考えられる。ただし、この種の研究では、あくまでセラピストの視点から情動制御や記憶といったクライアントの心理過程が説明されており、クライアント自身が心理療法という場をどのように意味づけ、そこでどのような体験をしているかについては検討されていない。筆者は、アタッチメント理論と精神分析を対比的に論じるなかで、近年のアタッチメント理論は、個人が迫真性をもって体験してい

田附：クライアントのアタッチメントパターンと心理療法における内的体験

表1 クライアントのアタッチメントパターンと成人への個人心理療法の関連についての研究の概観のまとめ

研究の分類	代表的な研究	意義
(1)効果研究	Fonagy et al. (1995) Levy et al. (2011)	実施した心理療法を外側の視点から評価する。
(2)プロセスに関する研究	Diener & Monroe (2011) Hardy et al. (1999) Dozier (1990)	クライアントとセラピストが実際どのような関わりをするのかについて客観的に検討する。
(3)クライアントの特徴を記述した研究	Holmes(1993) Slade(1999)	実際のクライアントのふるまいに加え、クライアントのなかで生じている心理過程についても検討する。

ることを指す「reality」を探究するようになってきているものの、情報処理理論をもとに個人の外側の視点から「reality」を説明、推測するため、クライアント自身の視点から描かれる「reality」に重きをおく精神分析とは「reality」を捉える視点に差異があると指摘した（田附, 2015）。クライアントの特徴を記述した研究におけるセラピストからみたクライアントの心理過程は、クライアントの外側の視点にもとづいた「reality」であると考えられる。しかし、クライアントの立場からの体験を理解するためには、外側の視点にもとづいた「reality」だけではなく、クライアント自身の視点から捉えられた「reality」、つまりクライアントの内的体験についても検討していくことが大切なのではないだろうか。クライアントの内的体験とは「クライアント自身の視点から主観的に捉えられる、クライアントが心理療法の場を意味づけ、そこで迫真性をもって体験していること」を指すと言えるだろう。クライアントのアタッチメントパターンと成人への個人心理療法の関連についての研究には、主にクライアントの外側の視点から検討がなされるという特徴があるが、クライアントの内的体験にも目を向けることで、多面的なクライアント理解が可能となり、クライアントの本質により迫ることができるようになると考えられる。

ただし、本稿で概観した研究のなかでクライアントの内的体験を検討しているものが全くないというわけではない。プロセスに関する研究のうちの治療同盟の評価に関する研究、およびクライアントのふるまいに関する研究に含まれる Saypol&Farber (2010) は、クライアントからの報告をもとに治療同盟の評価や自己開示について検討している。また、クライアントの特徴を記述した研究に含まれる事例研究では、例えば、クライアントが心理療法の意味に疑問を呈していたり（三上, 2013）、また別のクライアントがセラピストに理解してもらえた感覚を得たことを述べていたり（Holmes, 1993）するなど、クライアントの内的体験についての記述もなされている。これらはクライアントの内的体験の一端を示していると考えられるが、統計的検討を用いた研究では治療同盟の評価や自己開示に限られており、また事例研究でも少しふれられている程度であるため、クライアントの内的体験を扱った研究の萌芽として理解できるだろう。

クライアントの内的体験を探究する萌芽的な研究はあるが、それらの問題意識をたどってみると、クライアントの内的体験について検討しようとしていたわけではないことがみえてくる。治療同盟の評価に関する研究や Saypol&Farber (2010) では、クライアントがどのように感じていたかを検討しようとしていたわけではなく、クライアントに質問紙調査を行うという方法をとったことで結果的にクライアントの内的体験を扱うことになっていた。唯一、Diener & Monroe (2011) は、セラピスト評定とクライアント評定の治療同盟の差異を検討しており、クライアントの内的体験について扱おうという意図はみられるが、これもあくまで付随的な分析でなされたものである。事例研究でも、クライアントの語り、記憶、情緒の表出などセラピストからみたクライアントの特徴を示すことが目指されるなかで内的体験について記述されていたにす

ぎない。したがって、クライアントのアタッチメントパターンと成人の個人心理療法の関連についての研究においては、クライアントの内的体験を検討する萌芽はあるものの、クライアントの内的体験を明らかにしようという問題意識をもち、それについて正面から扱った研究は全くと言ってよいほどみられないのが現状であると言える。しかし、先述のように、クライアントの本質により迫るためには今後クライアントの内的体験について正面から扱った研究が望まれるだろう。さらに、アタッチメント理論が心理療法により資するためには、クライアントのアタッチメントパターンとクライアントの内的体験の関連を検討していくだけにとどまらず、アタッチメント理論がクライアントの内的体験理解の鍵としてどのような意義を果たしうるかについて検討していくことも重要であろう。そのことを通じてこそ、Bowlby (1988) が目指していた個人の外的世界と内的世界の相互作用について理解を深めていくことが可能となるのではないだろうか。

謝辞

本論文の執筆にあたり、ご指導いただきました京都大学大学院教育学研究科大山泰宏准教授に深く感謝申し上げます。

引用文献

- Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.
- Bernecker, S. L., Levy, K. N., & Ellison, W. D. (2014). A meta-analysis of the relation between patient adult attachment style and the working alliance. *Psychotherapy Research*, **24**, 12-24.
- Bowlby, J. (1969). *Attachment and loss, vol.1: Attachment*. Basic Books.
- Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss, vol.2: Separation: Anxiety and anger*. Basic Books.
- Bowlby, J. (1988). *A secure base. Clinical applications of attachment theory*. Routledge.
- Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In Simpson, J. A., & Rholes, W. S. (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. Guilford Press.
- Crowell, J. A., Fraley, R. C., & Shaver, P. R. (1999). Measurement of individual differences in adolescent and adult attachment. In Cassidy, J., & Shaver, P. R. (Eds.), *Handbook of attachment theory, research, and clinical applications*. Guilford Press.
- Daniel, S. I. F. (2006). Adult attachment patterns and individual psychotherapy: A review. *Clinical Psychology Review*, **26**, 968-984.
- Diamond, D., Stovall-McClough, C., Clarkin, J. F., & Levy, K. N. (2003). Patient-therapist attachment in the treatment of borderline personality disorder. *Bulletin of the Menninger Clinic*, **67**, 227-259.
- Diener, M. J., & Monroe, J. M. (2011). The relationship between adult attachment style and therapeutic alliance in individual psychotherapy: A meta-analytic review. *Psychotherapy*, **48**, 237-248.
- Dozier, M. (1990). Attachment organization and treatment use for adults with serious psychopathological disorders. *Development and Psychopathology*, **2**, 47-60.

- Dozier, M., Cue, K. L., & Barnett, L. (1994). Clinicians as caregivers: Role of attachment organization in treatment. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **62**, 793-800.
- 遠藤利彦 (1992). 愛着と表象——愛着研究の最近の動向: 内的作業モデル疑念とそれをめぐる実証研究の概観. *心理学評論*, **35**, 201-233.
- Fonagy, P., Leigh, T., Steele, M., Steele, H., Kennedy, R., Mattoon, G., Target, M., & Gerber, A. (1996). The relation of attachment status, psychiatric classification, and response to psychotherapy. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **64**, 22-31.
- Fonagy, P., Steele, M., Steele, H., Leigh, T., Kennedy, R., Mattoon, G., & Target, M. (1995). Attachment, the reflective self, and borderline states.: The predictive specificity of the adult attachment interview and pathological emotional development. In Goldberg, S., & Muir, R. (Eds.), *Attachment theory: Social, developmental, and clinical perspectives*. Analytic Press.
- Hardy, G. E., Aldridge, J., Davidson, C., Rowe, C., Reilly, S., & Shapiro, D. A. (1999). Therapist responsiveness to client attachment styles and issues observed in client-identified significant events in psychodynamic-interpersonal psychotherapy. *Psychotherapy Research*, **9**, 36-53.
- Hesse, E. (1999). The adult attachment interview: Historical and current perspectives. In Cassidy, J., & Shaver, P. R. (Eds.), *Handbook of attachment theory, research, and clinical applications*. Guilford Press.
- Holmes, J. (1993). *John Bowlby & Attachment theory*. Routledge.
- Holmes, J. (1998). Defensive and creative uses of narrative in psychotherapy: An attachment perspective. Roberts, G., & Holmes, J. (Eds.), *Narrative in psychotherapy and psychiatry*. Oxford University Press.
- Horvath, A. O., Del Re, A. C., Flückiger, C., & Symonds, D. (2011). Alliance in individual psychotherapy. *Psychotherapy*, **48**, 9-16.
- Jacobvitz, D., Curran, M., & Moller, N. (2002). Measurement of adult attachment: The place of self-report and interview methodologies. *Attachment and Human Development*, **4**, 207-215.
- Kobak, R. R. (1989). *The attachment interview Q-set*. Unpublished manuscript. University of Delaware.
- Korfmacher, J., Adam, E., Ogawa, J., & Egeland, B. (1997). Adult attachment: Implications for the therapeutic process in a home visitation intervention. *Applied Developmental Science*, **1**, 43-52.
- 工藤晋平 (2004). 「見立て」における成人愛着スタイルの利用とそのアセスメント——語りおよび治療者の情緒的反応から見た特徴. *心理臨床学研究*, **22**, 406-416.
- Levy, K. N., Ellison, W. D., Scott, L. N., & Bernecker, S. L. (2011). Attachment style. *Journal of Clinical Psychology*, **67**, 193-203.
- Levy, K. N., Meehan, K. B., Kelly, K. M., Reynoso, J. S., Weber, M., Clarkin, J. F., & Kernberg, O. F. (2006). Change in attachment patterns and reflective function in a randomized control trial of transference-focused psychotherapy for borderline personality disorder. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **74**, 1027-1040.
- Main, M., & Goldwyn, R. (1984). *Adult attachment scoring and classification system*. Unpublished manuscript, University of California.
- 三上謙一 (2009). 安全基地を確立するためのセラピストの機能について——アルコール依存

- 症の父親をもつ女子大学生への愛着理論によるアプローチ 心理臨床学研究, **27**, 591-602.
- 三上謙一 (2013). 愛着理論から見た心理療法の行き詰まりとその回復過程——逆転移としてのセラピストの眠気の意味 心理臨床学研究, **31**, 33-48.
- 中尾達馬 (2007). 乳幼児—養育者へのアタッチメント理論を応用した治療・介入 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメントと臨床領域 ミネルヴァ書房.
- Rogers, C. R. (1957). The necessary and sufficient conditions of therapeutic personality change. *Journal of Consulting Psychology*, **21**, 95-103.
- Rubino, G., Barker, C., Roth, T., & Fearon, P. (2000). Therapist empathy and depth of interpretation in response to potential alliance ruptures: the role of therapist and patient attachment styles. *Psychotherapy Research*, **10**, 408-420.
- 坂上裕子 (2005). アタッチメントの発達を支える内的作業モデル 数井みゆき・遠藤利彦 (編) アタッチメント—生涯にわたる絆 ミネルヴァ書房.
- Sauer, E. M., Anderson, M. Z., Gormley, B., Richmond, C. J., & Preacco, L. (2010). Client attachment orientations, working alliances, and responses to therapy: A psychology training clinic study. *Psychotherapy Research*, **20**, 702-711.
- Saypol, E., & Farber, B. A. (2010). Attachment style and patient disclosure in psychotherapy. *Psychotherapy Research*, **20**, 462-471.
- Shaver, P. R., & Mikulincer, M. (2004). What do self-report attachment measures assess? Rholes, W. S. & Simpson, J. A. (Eds), *Adult attachment: Theory, research, and clinical implications*. Guilford Press.
- Slade, A. (1999). Attachment theory and research: Implications for the theory and practice of individual psychotherapy with adults. Cassidy, J., & Shaver, P. R. (Eds.), *Handbook of attachment-theory, research, and clinical applications*. Guilford Press.
- Stovall-McClough, K. C., & Cloitre, M. (2003). Reorganization of unresolved childhood traumatic memories following exposure therapy. *Annals of the New York Academy of Sciences*, **1008**, 1-3.
- Szajnberg, N. M., & Crittenden, P. M. (1997). The transference refracted through the lens of attachment. *Journal of the American Academy of Psychoanalysis*, **25**, 409-438.
- 田附紘平 (2015). 心理臨床におけるアタッチメント理論の「現実性」の問題—精神分析との対比から— 京都大学大学院教育学研究科紀要, **61**, 79-91.
- Travis, L. A., Bliwise, N. G., Binder, J. L., & Horne-Moyer, H. L. (2001). Changes in clients' attachment styles over the course of time-limited dynamic psychotherapy. *Psychotherapy*, **38**, 149-159.
- Tyrrell, C. L., Dozier, M., Teague, G. B., & Fallot, R. D. (1999). Effective treatment relationships for persons with serious psychiatric disorders: The importance of attachment states of mind. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **67**, 725-733.
- Wallin, D. J. (2007). *Attachment in psychotherapy*. Guilford Press.
- 吉見摩耶・葛西真記子 (2009). 治療同盟と面接評価に影響を及ぼすクライアント側の要因——内的作業モデルと認知反応評定を通して 心理臨床学研究, **27**, 29-39.

(心理臨床学講座 博士後期課程3回生)

(受稿 2016 年 9 月 8 日、改稿 2016 年 12 月 2 日、受理 2016 年 12 月 26 日)

クライアントのアタッチメントパターンと心理療法における内的体験

—成人への個人心理療法に関する研究の概観を通して—

田附 紘平

本論文は、クライアントのアタッチメントパターンと成人への個人心理療法の関連についての先行研究を概観し、それらの成果や課題について検討した。先行研究の概観によると、クライアントのアタッチメントパターンは、(1) 効果研究、(2) プロセスに関する研究、(3) 事例、著者自身の臨床経験および Adult Attachment Interview による知見をもとにクライアントの特徴を具体的に記述した研究のなかで論じられていた。先行研究にはクライアントの外側の視点から検討がなされるという特徴があることが指摘されたが、クライアントの内的体験について検討することで、多面的なクライアント理解が可能となり、クライアントの本質により迫ることができるようになって考えられた。先行研究には、クライアントの内的体験を検討しているが、そのような問題意識はもっていない萌芽的研究もみられた。今後、クライアントの内的体験を正面から扱った研究が望まれることが指摘された。

Clients' Attachment Patterns and Inner Experience in Psychotherapy: a Review of Studies in Individual Psychotherapy with Adults.

TAZUKE Kohei

This paper presents a review of studies on the relationship between clients' attachment patterns and individual psychotherapy with adults, and discusses the findings and related issues. According to the review, these studies were classified as (1) outcome studies, (2) studies on the process of psychotherapy, or (3) studies that concretely described client's features based on a case, the author's clinical experiences, or the findings on Adult Attachment Interview. These studies seemed to have the viewpoint from outside of the client. Therefore, studies on clients' inner experience are considered to enable us to understand clients multilaterally and approach their true nature. There were some exploratory studies that dealt with the client's inner experience but did not aim to examine it. Further studies are needed to address this issue.

キーワード：アタッチメントパターン、内的体験、成人への個人心理療法

Keywords: attachment patterns, inner experience, individual psychotherapy with adults

